

飯島賢二の『恐縮ですが...一言コラム』

第 313 回 言ってみれば「腑抜けの猿集団」

2009.5.24

指示しなければ動かない。仕事とは指示通りやるものだと、本気で思っている連中がいる。業務を最後まで完璧にやり通せないで、必ずどこか細かい点が間違っている、そう、詰めが甘いタイプ。会社の中でもただ、何となく働いているタイプの人がいる。そうは言っても彼らは、朝は遅刻せず、大きなトラブルもないし、たぶん彼なりに、毎日一生懸命働いていると思っているのだろう。

がしかし、決まって彼らの目の輝きはどんよりと曇っており、にじみ出るパワーも全く感じる事ができない。一体何の目的でこの仕事をしているのか？ あまり良く、理解できないタイプ。彼らを不真面目とは言わないが、一様に活気がなく、無気力で意気地がない。ただ漠然と生きている。怒られ慣れてしまったのか、柳に風...の如く、全く向かってこない。まるで「腑抜けの猿集団」を見るかの如く、ストレスが溜まる思いになる。

恐らく彼らの共通の特徴は、「目標」がないということに尽きると思う。人間というものは、目標があると、それに向かって努力するという不思議な動物である。それは、人間の脳とは...ある目的を設定すれば、その達成に向けて自ら回路を作っていくという構造になっている故にある。だから、こうありたいと強く思い続けることが肝心であり、一連の脳の働きは意欲によって活性化される。志さえ高ければ、目が輝き、行動も伴ってくる、つまり意欲がわいてくる。その志を信じて、いかなる苦境下においても、断固たる実行力でやり抜けば、必ず大きなチャンスを取り込むことができる。このことは先人達が築いた、価値ある歴史を紐解けば、至る所の教訓を垣間見ることができるはずである。

言葉不適切だが、仮に彼ら「腑抜けの猿集団」とする。やっぱり「目標」がないに違いない。仕事は言われた事をこなすのではないはず。仕事を提供するお客様から「感謝」を戴いて初めて、完結するものである。感謝の伴わない仕事は、たとえ報酬を得たとしても、決して完成したものではない。間違っって半製品を提供してしまったとすれば、己自身はもちろんのこと、会社にも、会社の仲間達に対しても、懺悔の極みである。そんなことを絶対してはならないのが、今の自分の立場であること。そのために自分がどう行動し、どこから情報を集め、そんなサービスを提供したらよいか、その志を具体的に「見える化」したのが「目標」であると思っている。この、ビジネスマンとして、あるいは、常識ある社会人としての生き方の「目標」を持っていないのが、「腑抜けの猿集団」かもしれない。

目標がないという事は、志がなく、心がない、いわゆる「心ここに在らず」ということに他ならない。古代中国の経書『礼記(らいき)』に、有名な言葉がある。「心不在焉、視而不見、聴而不聞、食而不知其味、此謂修身在正其心」～心ここに在らざれば、視れども見えず、聴けども聞こえず、食えどもその味を知らず。—心が、仕事以外の他のことに奪われていれば、たとえ視線が物に向かっていても、その物が目には見えない。正しい事に心を集中しなければ、身を修めることはできない。そんな意味だと思っている。

最近「心ここに在らず」的若者が、随分多くなってきた。しかも結婚して子供までいて、一体彼らの価値観はどうなっているのだろうか。責任ある家長として親として、ビジネスマンとして、仕事も人生も絶対、逃げられない。そんなこと決まりきっているのだから、一步一步、真剣に生きていく方がいい！目一杯、思いっきりの心を注入して、明日からの動きを変えてみれば、きっとその心は豊かになってくる、そう信じている。